



Title	Substrate Specificity of Cytosolic α -Mannosidase from Japanese Quail Oviduct
Author(s)	奥, 久司
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38038
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	おく ひさ し 奥 久 司
博士の専攻分野の名称	博 士 (理 学)
学位記番号	第 1 0 1 2 0 号
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 理学研究科 有機化学専攻
学位論文名	Substrate Specificity of Cytosolic α -Mannosidase from Japanese Quail Oviduct (ウズラ輸卵管の細胞質 α -マンノシダーゼの基質特異性について)
論文審査委員	(主査) 教 授 長谷 純宏 (副査) 教 授 福井 俊郎 教 授 崎山 文夫

論 文 内 容 の 要 旨

細胞内における糖蛋白質の異化は従来リソソームで行なわれていると考えられてきたが、最近細胞質でも行なわれていることが示唆されている。私は糖蛋白質のオリゴマンノース型糖鎖の分解に関与していると思われる細胞質 α -マンノシダーゼの機能を探るため、まずその基質特異性を解析する方法の開発を行なった。

様々な糖蛋白質から調製したオリゴマンノース型糖鎖計 21 種類のピリジルアミノ (P A -) 誘導体を、分子サイズで分画する高速液体クロマトグラフィー (H P L C) と逆相 H P L C を組み合わせることにより分離した。これにより α -マンノシダーゼ消化物の構造を微量でしかも系統的に解析することが可能になった。

一方、細胞質 α -マンノシダーゼとして、ウズラ輸卵管中に Co^{2+} により活性化される中性の至適 pH を有する可溶性の α -マンノシダーゼを検出した。これらの特徴が従来報告されている細胞質 α -マンノシダーゼの特徴であることと細胞分画で本酵素活性のほとんどが輸卵管ホモゲネートの 105,000 $\times$ g 上清画分に得られたことより、本酵素は細胞質 α -マンノシダーゼであると考えられた。そこでウズラ 200 羽の輸卵管より本酵素を種々のクロマトグラフィーにより、比活性で約 3,000 倍に精製した。この酵素は PAGE 及び SDS-PAGE で単一なバンドを示し、還元した後 SDS-PAGE で調べると 100,000, 65,000, 50,000 の 3 種類のサブユニットからなると推定され、ゲルろ過から測定した分子量は約 330,000 であった。本酵素は p-Nitrophenyl α -D-mannopyranoside と $\text{Man}_5\text{GlcNAc}_2\text{-PA}$ (Km 値, 3 mM) を水解した。活性の至適 pH は 7.0 で二価の金属イオンにより活性化され、 Co^{2+} が最も有効であった。

$$\begin{array}{c} \text{Man } \alpha 1 \\ \quad \quad \quad \searrow \\ \quad \quad \quad 6 \\ \quad \quad \quad \quad \quad \searrow \\ \quad \quad \quad \quad \quad 3 \\ \quad \quad \quad \quad \quad \quad \text{Man } \beta 1-4\text{GlcNAc} \\ (\text{Man } \alpha 1-2)_0-2 \text{Man } \alpha 1 \nearrow \end{array}$$

論文審査の結果の要旨

— 46 —